

**Ruínas da Igreja do Carmo
e Museu Arqueológico**

Ruínas da Igreja do Carmo
e Museu Arqueológico

Ruínas da Igreja do Carmo
e Museu Arqueológico

カルモ教会



16世紀のカルモ教会

アントニオ・デ・オランダ作

リスボンの風景の詳細

カストロ・ギマラエンス伯博物館

写真: J. Pessoa/D. D. F. / I. P. M.

カルモ教会の歴史は1389年に遡ります。その年、設立者であるポルトガル軍最高司令官ヌーノ・アルヴェス・ペレイラの篤い信仰心によって建築が始められました。

教会はサン・ジョルジェ城に面した丘の上に建ち、その壮麗さやモニュメンタリティは、同じくリスボンにあるカテドラルやサン・フランシスコ修道院に並ぶものでした。早くからリスボンの町だけでなく、国そのものの象徴的な空間となったのは、ドン・ジョアン1世の下でポルトガル王国独立のために、覇権を迫るカスティーリャ軍と戦った有名なポルトガル人との縁が深かったことに由来します（1385年アルジュバロッタの戦い）。当初カルモ修道院はカルメル会修道士のすみかとなりますが、後にヌーノ・アルヴェス・ペレイラ自身が一修道士として修道院に入りここを終の棲家とすることで、教会に決定的な歴史を刻みました。

リスボンの町を象徴する空間

先駆的ネオゴシック建築を今に伝える証

修道院はゴシック様式に始まり、時代とともに増改築を重ねられ、新しい建築・装飾様式や趣向が加えられてきました。1755年、リスボンの町を激しく震撼させた地震によって建物は甚大な被害を受け、引き続き起こった火事で内部はほぼ壊滅してしまいました。



東側から見たカルモ修道院

写真: Henrique Ruas

カルモ教会及び修道院のファサード

G. Debrie 作 版画

1745年



まもなくネオゴシック様式を取り入れた再建が始められますが、1834年の修道会廃止に伴って中断されました。再建の初期から、身廊の支柱やアーチは先駆的ネオゴシック建築を今に伝える真の証であるとともに、舞台装飾的な面を兼ね備えています。

19世紀半ば、廃墟と中世の古い建物は叙情的な趣を残したまま再建を中断され、教会の身廊は空に開かれたままとなりました。こうして廃墟となった教会の叙情的な景観は、19世紀の芸術愛好家たちの目を大いに楽しませ、今日も尚私たち現代人を魅了しています。

ノッサ・セニョーラ・ド・

カルモ教会の身廊

写真 José Pessoa/IPM/DDF





キリストの復活

キリストの生涯を描いた連作の

飾り板の一部 浮き彫り

15世紀半ば

塗金、多色装飾の跡を残す雪花石膏

ノッティンガム教会作業場、イギリス

写真: José Pessoa/D. D. F. / I. P. M.

カルモ考古学博物館は、1864年ポルトガル考古学協会初代会長ジョアキン・ポシドニオ・ナルシーゾ・ダ・シルヴァ(1806-1896)によって設立されました。修道会廃止後、国は修復措置を採らず、市民や関係機関からも放置された結果、荒廃し失われつつあった国家遺産を維持するためでした。ポシドニオ・ダ・シルヴァは、壮大な浮き彫りの葬儀モニュメントや壁画、アズレージョ(装飾タイル)、紋章、その他様々な特徴の作品等、膨大な数の建物や彫刻の断片を収集していったのです。

サン・ジャヌアリオ伯爵(同じくポルトガル考古学協会会長)は様々な国で外交官を務め、プレ・コロンビア文化の“エキゾチック”なコレクション(陶磁器、小像、中央・南アメリカ出土のミイラ2体)と石棺、エジプトのミイラを博物館に寄贈しました。関心を持つ人々が、芸術・建築技術により身近に触れられるような“生きた博物館”が目指され、早くから併設された図書館は今でも保存されています。

博物館の多彩な遺産の中でもひととき目を惹くのは、ヴィラ・ノヴァ・デ・サン・ペドロの有史以前の出土品、女神の棺(ローマ時代、紀元後3-4世紀)、モサラベの彫刻3点(5世紀)、ドン・フェルナンド1世(1380-83)の墓、ノッティンガム教会作業場の雪花石膏製浅浮き彫り(15世紀)です。

カルモ考古学博物館は、1世紀以上に渡って科学関係者や一般の人々に親しまれる中で、“ロマンティックな風”に包まれ、今ではリスボンの町で美を楽しむ文化、憩いの場となっています。年間約6万人の人々(海外からの来館者を含む)が訪れ、リスボンで来館者の最も多い博物館のひとつに数えられています。

バロック様式のアズレージョ画

18世紀前半

マヌエル・ドス・サントス

聖パトリシオ神学校、リスボン

写真: Paulo Cintra/Laura Castro Caldas



カルモ考古学博物館の屋根に覆われていない敷地は、面積約1060 m²で古い教会の身廊と袖廊からなっています。この屋外空間を作り上げる壁には、紋章のコレクションの大部分(約100の紋章)や中世・近代の碑石、ゴシック・マヌエル・ルネッサンス各様式の重要な彫刻作品数点が2列に並ぶ芝地に縁取られて展示され、リスボンの青い空へと開かれています。

屋根に覆われた部分は教会の後陣(主礼拝堂及び4つの側面礼拝堂)からなり、現在ここに博物館の最も重要な作品の数々が展示されています。

壮麗な空間



後陣の北側に位置する広い聖具室は洗礼室とともに壮麗な空間を生み出しています。81 m²の敷地全体にゴシック様式とバロック様式が見事に調和し、特別展や記者会見、セミナー、会議などに使用されています。

これらの構造に加えて、建物の入り口には2つの“塔”が並び、現在では当博物館及び紋章委員会の事務局、ポルトガル考古学協会の書庫、喫茶コーナー、来館者・従業員用の化粧室として使われています。



ルネサンス彫刻

グロテスク模様のフリーズの断片

16世紀 石灰石

写真: José Pessoa/D. D. F. /I. P. M.

博物館には照明設備が完備されており、特に遺産である作品群や建物の価値が生かされるように配慮されています。また、屋外での特別行事に対応できる電気設備も整えられています。

カルモ考古学博物館は、その建物の美しさ、空間の荘厳さ、歴史、落ち着いた佇まい壁に囲まれて漂う静けさゆえに、文化的な催しや各種促進イベントの場としても活用されています。





Associação dos Arqueólogos Portugueses



Museu
Arqueológico
do Carmo

閉館日

月曜日、クリスマス、新年

聖日曜日(復活祭)、5月1日

問い合わせ

Associação dos Arqueólogos Portugueses

Museu Arqueológico do Carmo

Largo do Carmo 1200-092 Lisboa- Portugal

TEL 213 478 629/ 213 460 473

FAX 213 244 252

Co-ordination

José Morais Arnaud

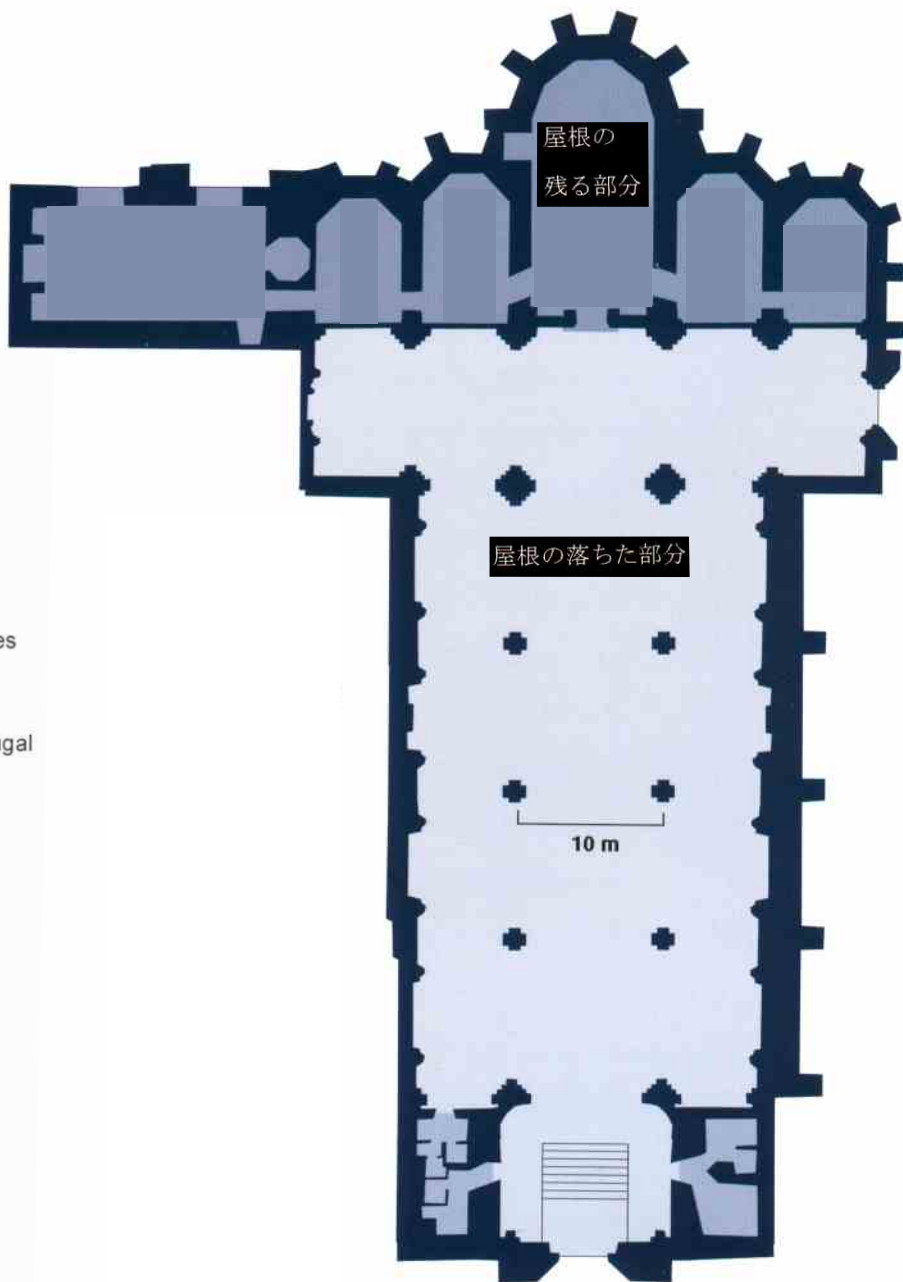
Carla Varela Fernandes

Graphics

atelier de design Nuno Vale Cardoso

Layout and printing

Textype





MAC

MUSEU
ARQUEOLÓGICO
DO CARMO